別記様式第６

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博　士（　文　学　）	氏 名	笠井　今日子
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当		

論　文　題　目

近世石見銀山領における鑪製鉄業の展開と地域社会

論文審査担当者

主　　査	教授	中山　富廣
審 査 委 員	教授	西別府　元日
審 査 委 員	教授	勝部　眞人
審 査 委 員	教授	本多　博之
審 査 委 員	教授	古瀬　清秀
審 査 委 員	総合科学研究科　教授	佐竹　昭

〔論文審査の要旨〕

本論文は，石見銀山領（幕府直轄領）における鑪製鉄業の歴史的展開を，実証的な考察に基づいて明らかにし，鑪製鉄を中核として成立していた地域経済のあり方と，それを支えた鑪師の役割について分析したもので，５章と序章・終章（要約）で構成されている。

研究史を整理した序章に続き，第１章「鑪製鉄業の生産工程と検討地域の概要」では，鑪製鉄の生産工程と対象地域の特質について，四つの生産工程のうち「採鉱」（砂鉄採取）と「製炭」が，地域農民にとっての鉄山稼ぎの場であり，また銀山領の鑪製鉄が銑鉄生産に特化していたことを指摘する。

第２章「石見銀山領における鉄山政策と鑪製鉄業の展開」では，御林（代官管理山林）請負制度の変遷から，当初御林運上に内包されていた鑪製鉄関連の諸役が，18 世紀半ばから次第に独立した役として徴収されるようになったこと，その背景に御林が燃料供給源として機能する状況に移行しつつあったことが示される。またその頃には流通網の整備によって，大規模化した製鉄施設が資源を求めて移転することなく固定され，かつ永続的な鑪操業が実現されるようになったことを指摘する。

第３章「鉄流通構造の変容と鑪師ネットワークの形成」では，これまで各鑪師が取引先を固定せずに自由な取引によって利益をあげていたが，1770 年代の幕府鉄座政策によって打撃を受けたため，鑪師たちは結束を強め，銑鉄価格回復をめざす流通構造をめざしたこと，それは鑪師たちの大坂市場への反抗であり，流通への関与を強め相場形成の主導権を握ろうとする動きであったと指摘する。そしてこのことが当時の江川流域の鑪師たちに「川筋鑪師」として一体感を形成させ，経営慣行をも共有されるようになり，互いに既得権益を侵すことなく，また不足しがちな製鉄資源を融通しあう相互補完的な鉄山経営となっていったことを明らかにしている。

第４章「石見銀山領における鑪製鉄業の動向と新興鑪師の台頭」では，浜原西田屋の鉄山経営をとりあげ，銀山領の鑪師が鉄座政策以来の窮状をいかに乗り越えていったかについて考察する。慢性的経営赤字に陥っていた西田屋はそれでも鉄山操業の維持を優先していたが，それは鉄山稼ぎの恩恵を受けていた村方の要望でもあったこと，しかし他地区では既得権益の保持をはかる鑪師に反発する村方もあり，こうした既存の鑪師の経営悪化に対して新しく鑪経営に参入する者が出現したことを指摘する。

第５章「石見銀山領における鉄山稼ぎと地域経済」では，百姓の渡世を支えた鉄山稼ぎについて，製鉄用炭の生産とその流通を考察する。銀山領の製鉄施設は，江川流域・日本海沿岸・内陸部の三つに大別されるが，江川流域の鑪は江川舟運の活用により，江津から砂鉄を，中流域の山間部から木炭を製鉄施設に集中させることで操業を実現していたことを明らかにする。こうした経営のあり方が江川流域の村々に広範で恒常的な労働力需要を生み出し，鑪を核とした活発な領内流通が形成されていたことを明らかにする。

石見銀山領内の鑪製鉄業を総括した本論文は，１万６千点にもおよぶ江津市桜江町の中村家所蔵文書を丹念に読み込み実証的に分析したもので，銀山領の分析でありながら石見地方の鑪製鉄業を初めて体系的に論じたものである。山内（さんない）労働力の分析が不十分であるものの，本論文は安芸・出雲地方の分析が中心であった従来の研究史を，大きく前進させるものとして高く評価できる。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考　要旨は，1,500 字以内とする。